

「北朝鮮のミサイル発射と核実験」

2017年09月08日

北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)はミサイル発射と核実験を国際社会の批判を無視し、立て続けに行っている。長足の進歩に驚かされる。緊張が高まっているが、何とか平和的な解決をしてもらいたいものである。北朝鮮の言い分も多少、理解できる。イラクは、大量破壊兵器があるという、それこそフェイクニュースによって、米国を中心とした有志連合軍に攻撃され、指導者・フセインは捕らえられ、有罪、死刑になった。空爆、侵攻によってイラクは混沌とし、IS(イスラム国)を生み出す契機になった。リビアも攻撃を受け、指導者・カダフィは反政府軍によって殺害され、現在も収拾のつかない状態にある。この二国は核を持っていなかった。北朝鮮の金正恩は核爆弾を搭載したミサイルを持てば、攻撃されないと考えた。「ならず者国家」と指定されたら、攻撃を受け、国家は滅亡する。核こそが国を守り、生き残る唯一の方法である。海軍や空軍には力を入れず、核とミサイルに特化した軍事態勢を作り上げていった。米韓は合同軍事演習を毎年、膨大な火力を用いて、軍事境界線近くで行っている。「斬首作戦」などと、スパイ映画並みの計画もあるという。独裁者は皆、恐怖におののいているが、金正恩の不安も計り知れないだろう。

彼の望みは休戦協定を破棄し、平和協定を結び、国の存続が承認されることである。そのためには、核とミサイルを持たなくても、国際社会に門戸を開き、自由貿易の道を選べば、軍事的恐怖はなく、国民も安心して、豊かな生活ができると思うのだが、その道を選ばなかった。金王朝の存続を核で守ろうとした。

北朝鮮は、正式名称で謳っている民主主義でも共和国でもなく、金王朝の独裁国家である。北朝鮮の映像を観る度に、日本の戦前、戦中の光景と重なる。天皇のために死ぬことを至上の価値とした。そして、「欲しがりません、勝つまでは」と窮乏に耐えた。北朝鮮国民は金正恩に忠誠をつくし、全てを献げることが強要されている。金正恩の意に少しでも添わなければ、肅清される恐怖政治下にある。彼らの苦難を理解できるのは日本である。かつての日本と全く同じだからである。彼らの生活を想像すると、心が痛む。生活の実態を報道されれば、国際世論は変わるのではないか。

核弾頭を搭載できるミサイルを保有した北朝鮮に対し、米国をはじめ、国際社会は打つ手を失っている。経済制裁も効き目が無い。中ソも制裁を加えるつもりはない。金正恩は言いたい放題、挑発的な言葉を発している。北朝鮮の独壇場の様相を呈してきた。しかし、北朝鮮は攻撃を仕掛けると、圧倒的な軍事力で国は壊滅的に破壊されることを知っている。米国が攻撃を始めたら、韓国、日本に甚大な被害が生じる。「米国に死者は出ない」という人もいるらしいが、国際世論は米国を許さないだろう。軍事的な選択、解決方法はない。ならば、米国は超大国、世界の警察のようなプライドを捨て、北朝鮮が核保有国であることを認め、対話に臨むべきである。それ以外に道はない。

自分は核を持ち、お前は持つなという主張は筋が通らない。核という「悪魔の兵器」だから「核不拡散条約」が成り立っている。米朝は互いに認め合い、武力衝突を回避するために対話を模索する。その後「核使用禁止条約」「核廃絶」へと進めばよい。

安倍首相の米国一辺倒は変わらず、「圧力」しか言わず、緊張を煽り、無意味なJアラートを鳴らし、ミサイル迎撃のためのシステム配備に懸命で、軍事費の増大を図るのみである。北朝鮮は日本に対話の道を備えてくれと言っているのではないか。「平和憲法」を持つ国として、対話の道を開くような世論を形成すべきである。